

「現人神」の意味について

塹江 清志・水野 和夫*・塹江 光子**
システムマネジメント工学科
(2002年9月4日受理)

The Meaning of “ARA-HITO-GAMI”

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO* and Mitsuko HORIE**
Department of Systems Management and Engineering
(Received September 4, 2002)

Summary

The purpose of this paper is to consider the meaning of *ara-hito-gami* as constituted in *Meiji-Ten-nou*.

The paper examines the following matters:

1. In *Meiji*-era Japan, the psychology of the “feeling of togetherness” foreshortened “the view of life and the world” in the Japanese mind.
2. This foreshortened view of life and the world discouraged consideration of political strategy.
3. As a result, Japanese public opinion on matters of national political strategy was not well informed.
4. Consequently, the *Meiji*-era national political leadership felt the need to suppress public opinion.
5. *Meiji Ten-no* was constituted as *ara-hito-gami* in order to enhance the emperor’s authority through assertions of his “divinity.”

1. 目的

本論文の目的は、「現人神」の意味について考察することである。

塹江¹⁾は「[天皇]の「社会心理的基盤」において、天皇なる存在は、根源的には日本人の民族的精神構造である一体感の心理に立脚することを論証した。和歌森²⁾も述べているように、明治元年の1868年から1945年8月15日までの間は、天皇制の歴史において特異な時期であった。その意味は、この期間彼は、現人神という人間神であり、そして、天皇の歴史の中で最高の権力を有していた時期であったという意味である。

本論文の目的は、この期間彼がそのような存在であった理由を一体感の心理との関わりにおいて考察することである。

2. 一体感の心理について

2.1 一体感の心理とは

塹江³⁾は「[一体感]と「断絶感」において、一体感

の心理（一体感信仰の心理）とは、「個人が他者との人間関係において、両者の間に一体、そして、一体感が存在する。存在しうるといふこと意識的にせよ、無意識的にせよ、その存在に対する客観的証拠に基づかずに先験的に信じている、あるいは、信じたいという心理・心的状態である。」としている。

この心理が、日本人の全ての心理特性の根底に存在する日本人の民族的精神構造である。

2.2 日本人の精神構造の特性としての「無策」

世界不在の心に世界観は生まれぬ。世界観なきとこに策など、つまり、自己の生の維持のために環境世界に対峙して諸々の欲求充足行動を遂行するに際しての策など導出されるはずはない。個人・集団・組織・企業体・民族・国家などがそれぞれの単位で生を全うするための策などは存在しない。即ち、無策である。国家経営の策を立案し遂行するのが政治であるから、ここに日本国の政治政策不在・国家経営政策不在、即ち、政治不在の伝統が生ずるのである。

2.3 日本人の精神構造の特性としての「ご意見」

日本人の社会に存在するのは、個々人の欲求に基づく

*愛知工科大学 **聖徳学園岐阜教育大学

要求である。それを日本人は、意見だと錯覚している。(昨今の会議の席上で自分の意見を ご意見ですが…あるいは、ご意見をご提案させていただきます…とのたまたま。言葉の使い方が二重に間違っている。)

欲求・要求はあくまでも欲求・要求でしかなく、決して意見に格上げ出来るものではないし、また、昇華されるものではない。意見の辞書的意味は、考え・見込みであるが、それは、あくまでも、対峙的世界の存在を前提として、それを踏まえての観察者の考え・見込みなのである。それ故、日本人の精神構造においては、意見は不在なのである。

2.4 日本の政治手法の終焉

選業民の欲求に基づく要求を政治家がしかるべき政府の組織に仲介するという活動は政治家が自己の地位を維持するための政治活動の中では実質的には最重要部分であろう。この仲介活動は、日本政治家だけではなく、世界の全ての政治家が共通に行うものである。しかし、世界に依拠した策不在の日本の社会では、利己的な欲求に基づく要求を正論で正当化し、粉飾出来ない。

2002年6月29日の鈴木代議士逮捕の副次効果(いや主効果?)は、日本の政治手法は、つまり、正論なき仲介は「斡施収賄罪」として断定されることを日本人に認識させたことである。この事件の示唆するところは、当局は、その気になれば、どの政治家をも随意に、そして、随時に斡施収賄罪として摘発することが可能であることを示したことである。とすれば、日本の政治手法の終焉がこの事件の結果であり、この事件の歴史的意義は大である。

2.5 政道奏聞に及ばず

日本人の心に意見が不在である以上、衆愚に意見を求めることは有害ですらある。と認識していたからこそ家康は徳川家の家訓として、政道奏聞に及ばずとしたのである。この家訓が破られたのは、黒船来航事件においてであった。結果は、徳川家にとってやはり凶と出た。

信長は、桶狭間の戦いの時に、軍議なしに単騎で真先に出陣した。軍議は無駄なだけだと彼はわかまえていたのだ。日本人といえども、戦国時代に毎日生死を賭けて生き抜いてきた戦国の武将達は、日本人離れがしていた。従って、日本的リーダーシップを採らなかったのである。でなければ、乱世の世におい武将として生き残ることは不可能であったはずだ。日本的リーダーシップとは森のリーダーシップ(つまり、方向感覚(経営政策)など不要であり、どっちに向いて歩いても、いずれは水に行き着く。砂漠のリーダーシップでは、方向感覚のみが生死を決定する。)であり、衆愚に迎合するものであり、急場

においては集団を全滅に導くだけである。意見無き愚かな国民の皆さんや政治家諸先生のご意見など百害あって一利なしである。現に憲法調査旅行(明治15年・1882年)の際、皇帝ウイルヘルム一世は、伊藤博文に「衆愚の意見は出来る限り抑えろ、国会など開設するな!」という日本の社会では永遠に通用する advice をしてくれたのだ。(しかし、自由民権運動などの高まりなどの結果、明治23年11月26日午前10時第1回帝国国会開会に至り、これを契機に日本の政治不在が進行した。結果として、昭和期の軍部台頭につながるが、これはむしろ政治家の無能さ(政策立案能力のなさ)の結果である。太平洋戦争の敗因を軍部の無謀な独走として処理するのが戦後のやり方であった。死人に口なしである。)

二度目の敗戦を経て、第3回目の明治維新(平成維新)の局面に置かれた現在の日本において、ワイドショーの人気を基盤にした日本国の政治家達の国家経営に関するリーダーシップは全く頼みにならない。三度目の敗戦は必至である。

2.6 自己・他者認識の欠如の因としての一体感の心理

① 自己認識欠如の因としての一体感の心理

一体感の心理は、一方では、前述のように世界の対象化を阻害し、日本人の心に世界観を欠如させる。他方では、それは、自己自身対象化を阻害する。自己自身を対象化しえないことは、自己を他者の立場・視点から客観的に、ということは、相対的に認識し、評価するという作業を不可能にする。つまり、己を知ることを不可能にする。

明治維新以降の国家経営戦争においては、国際試合での対戦相手である欧米諸民族との比較において日本人が自己自身を認識・評価しておくことが、生き残るためには必須のことであった。正確な世界観と正確な自己認識の上に立っての国家経営政策を立案し、遂行することが必須のことであった。しかし、歴史的事実として、明治135年日本人が自己自身を客観的に認識するための作業を行なったとは云えない。その端的な例として、日本人の精神構造の特性を象徴する言葉として、大和魂という言葉ほど幾多の場面で多くの日本人によって用いられてきた言葉はなかった。が、この言葉の意味する心の実体を明確に解明した研究は皆無である。著者に云わせれば、それは、幼児が示す甘えの心である。すれば、反合理的精神である。非ではなく反である。俗に云えば、自己の感情に溺れ、周囲をはばからず、感情を周囲にたれ流すという甘ったれた、いわゆるカラオケの心である。戦争行動においては、有害以外の何ものでもない心である。

② 他者認識の欠如の因としての一体感の心理

第2次大戦開始時、米国は、対日戦勝利を目指して、

国家的プロジェクトに基づいて学術的研究領域を含む多くの領域から大量のスタッフ（例えば、日本に滞在した経験のあるキリスト教の宣教師なども）を動員して、日本人（心理を中心にしての）研究作戦を発動した。つまり、敵を知る作戦を開始したのである。

一方、我が日本国は、敵性国語使用禁止と称して英語教育を各レベルの教育機関で廃止した。つまり、敵を知ることが放棄する作戦を実施したのである。海軍兵学校でも事の是非が議論されたという。ある歴戦の下士官が「米兵を捕虜にしたとき、どうやって彼から情報を収集したらよいか？」という素朴な質問をしたという。

かと思うと、明治の初期、我が日本国の文部大臣の森有礼などは、国語（日本語）を英語にと主張した。フリーメーソンの会員は、涙を流して欣喜雀躍したことであろう。尤も、森自身会員のはずだ。実に面白い民族である。戦時ならずとも、そして、対戦相手でなくとも、自分自身が人間存在であるという観点で、日本人とは誠に研究対象として尽きせぬ興味を抱かせる人種である。

これらの事実、そして、その因って来たところが、戦中・戦後を通じてあまり話題にならない、つまり、取り立てて騒ぐ程のことではないとされているところが又面白い。ということは、日本人の感覚としては、普通のことである証拠である。そして、今後も事に臨んで何度でも反復されうることを保障しているのである。

著者に云わせれば、あれもこれも一体感の心理の発露なのである。この心理の故に、英語に日常的に頻繁に接していると親近感が生じる。英語を介して英語を国語とする民族に親近感が生じると、折角、鬼畜米英というスローガンの下、敵愾心を煽り、戦意の昇揚に努めていることが無駄になる。故に、英語禁止なのである。

各民族の国語ほどその民族の精神構造を反映したものはない。日本語を放棄して英語を国語にするには、米英人の精神構造を持たねばならない。いや、「心は一つ 人類皆同胞」問題はないのだ。

鬼畜米英人の心を下手に研究すると、米英人に一体感を持ってしまい敵に味方するかも知れない。これは不味い、研究は止めておこう。

敵を知り、己を知る の正反対である。これでは、国家経営戦争に勝てないことは、数千年前に明らかにされている。

2.7 一体感の心理の世界

① 個体発生における成長としての一体感の心理からの脱却

胎児期においてすでに人間には意識が存在し、胎内での体験が、出生後記憶として再生され得るといふ。胎児期においては、物理的に、自己＝（胎内）宇宙 である。

当然、一体感が形成される。そこでは、自己以外の存在は、一切皆無である。禅の世界では、大悟したときの心理・心境が、自己＝宇宙 の心理であるという。

出生後も、個々の人間の心的世界においては、特に幼児前期（3才位まで）では、胎児期と同じ状態が持続する。この世界・宇宙観が崩壊して、世界観の再構築が開始される最初の契機が、いわゆる躰を通じての欲求阻止（欲求不満・挫折）体験である。ここで、彼は自己と自己が身を置く環境世界との間に断絶感を意識し、世界・宇宙を自己とそれ以外とに二分して意識するようになる。つまり、対峙的世界の発生である。世界が世界として対象化されるのである。そして、次の段階で、世界に逆照射されて自己が自己として対象化されて抽出・折出され、再認識されて出現する。

そして、その後の生育期間を通じての数々の挫折体験を積み重ねて成人となった時点では、通常の場合、彼の社会的適応を可能ならしめるような世界観と自己意識とを具備しているのである。

② 日本人の心的未熟さ

前述の世界観・自己意識の個体発生的観点に立脚すれば、比較の上では、日本人の民族的精神構造としての一体感の心理とは、幼児前期の人間の心性に相当し、欧米人の断絶感の心理とは、成人後の人間の心性に相当するものである。この限りにおいて、日本人の心性はより未熟であると云える。

最近、進化論的にも、日本人の未熟性は実証されているという（澤口ら⁴⁾）。人間はチンパンジーから進化し、人類の祖先は、ネグロイドであり、ネグロイドから進化したのが、コーカソイドであり、5万年前にコーカソイドから進化してモンゴロイドが出現し、モンゴロイドの中でも日本人が最も進化しているという。進化しているということは、出生直後の状態が、それ以前の種のそれよりも種としての完成度がより未熟であり完成（成体になる）までにより長期間を要するということである（完成（成体）の時点では、進化度が低い種よりも優れた水準に到達する。）。要するに大人になるまでの時間がより長くなるということであり、このことは長期間に亘って躰・訓練・教育しなければならないということである。教育にコストがかかるということである。コストが同じならば、より進化した種の方がより未熟で、適応能力において劣った存在になることを意味する。

とすれば、コーカソイドに属する西欧人は、歴史的・風土論的・精神分析学的精神構造の観点に立てば、個体としての完成度 100%に達するに十分な訓練・試練・教育・経験・学習・躰などを西欧の風土において、数千年に及ぶ生活の歴史を通じて受けて来た。それに反して、他民族との比較において、世界の諸民族の中で最も恵ま

れた生活環境（即ち、水と安全が無償）の中で、1万6500年間の生活史の日本民族は、個体としての完成度が極めて不十分な結果になったのである。更に、第2次大戦における敗戦後は、教育権の自主性が侵害された結果、進化論的観点に立脚した日本民族としての教育という点から見れば、完全にと云っていい位教育が損なわれて来た。特に、最近では、個性尊重・ゆとり教育・のびのび教育で学級崩壊を招来し、最後のとどめとして、週休2日制の打撃を受けた。これで、将来へ向けて、世界諸民族の中で日本民族が最も未熟な状態で成人になる（最近の成人式の状況に見事に反映されている。）ことが保障されたのである。

③ 狂気の世界の住人としての日本人

日本人の心的世界を土居⁵⁾は、2つの同心円で表現している。円の中心に自己が位置する。そして、小円内は人情の世界である。つまり、自己の甘えが、無条件・無制限で通用する世界である。小円と大円との間は義理の世界だと云う。つまり、自己の甘えが、条件付・制限付で通用する世界である。大円の外側は、義理も人情も通用しないアカの他人が住む世界である。アカの他人とは、自己の甘えが通用しない人間のことである。従って、日本人の心的世界には、他者は存在せず、外側と内側（大円の内側）とに二分される。内側は、甘えが通用する世界で、外側は、通用しない、換言すれば、不在の世界である。

塹江⁶⁾は、一体感の心理を前提としてはじめて甘えの心理が成立するとしている。従って、土居の甘えの心理による心的世界の構造を一体感の心理で置換してもよい。自己の一体感の心理が通用しない人間は、アカの他人として大円の外側に締出しておく。日本人が、一体感の心理に依拠して生きる限り、敵・味方の区別は、この心理（が妥当するか否か）を基準としてなされる。敵は、云うまでもなく、この心理、及び、この心理から派生する心理が妥当しない人間である。

戦争でのこの心理の発露は、日本人がこの心理に依拠して生きる限り、日本人にとって心的次元での勝利とは、この心理が通用する領域が拡大すること、即ち、大円の円周の半径が長くなることである。究極的勝利とは、大円の円周が消失し、かつ、小円の円周も消失し、（義理は無限に人情を志向（指向）する）、宇宙全領域が人情の世界となること（八紘一宇の精神）である。究極的敗北とは、大円の円周と中心が一致し、つまり、自己の一体感の心理が妥当する世界が消失し、文字通り宇宙から断絶され、孤人となることである。

それ故、日本人の戦における目標は、大円の円周を「絶対国防圏」として、この領域の維持・拡大である。敵が物理的敗北によって、彼が日本人の希求する一体感の心

理が妥当する存在に強制的に改宗される時、大円の円周は、占領地の住人を大東亜共栄圏内の住人として取り込むことによって拡大する。マリアナ諸島を「絶対国防圏」として設定したが、陥落した。あく迄も日本人の心理圏を維持・保持するために「本土決戦計画」を立案した。失敗すれば、「一億総玉砕」である。日本人にとって、孤人＝死者であるから、論理的には筋が通る作戦計画である。

つまり、第1次太平洋戦争は、あく迄も、日本人の一体感の心理の維持・拡大という「心的次元」で遂行されたのである。戦争とは、世界の常識からすれば、あく迄も、国家経営作戦の1つの手段として「物的次元」で遂行するものである。この点から見れば、日本人は狂気の世界の住人である。

著者は、日本人の一体感心理に依拠した日本人の行動のメカニズムを以下の四段階論法として考えている。

第1段階：欲求に基づく要求が、願望として意識される。この段階は、全人類に共通に見られる現象である。当然、正気の世界である。

第2段階：願望が、甘えの心理によって、エスカレートし、実現の可能性を真面目に意識する。この段階は、断絶感に生きる欧米人においては見られない。狂気の世界の初期の段階である。

第3段階：この段階は、確信・信念の段階である（神州不滅・大和魂には敵はない・神風が吹く・神機到来・ユダヤ人陰謀説に惑わされるな・日本経済再生論・成せば成る・精神力万能論・必勝の信念などなど）

一体感の心理は、前途のように世界不在であるから、一言で云って現実検討が不可能となる。ということは、もう現実界の住人ではない。願望の実現可能性の意識が、現実検討なしに持続すると、それは固着し、一段と格上げされて、確信・信念となる。即ち、妄想である。とすれば、もう完全に狂人である。そして、作戦行動を発起する。100%の敗北・挫折である。

第4段階：この段階は、敗北・挫折という現実世界での事実直面に反応・対応する段階である。この段階での反応においてこそ日本人の真骨頂が発揮される。「そんな馬鹿な！」・「世の中間違つとる！」正に狂人ならではの反応である。かくて、敗北・挫折を否認する。気がつけば、原爆が投下されていた・経済は崩壊していた。

狂人の定義は、事実否認である。一体感心理の世界の

住人は、精神病予備軍である。発症の契機は、現実世界での現実的出来事である。その当人にとっての利害は関係がない。利なら、そのまま有頂天・舞い上がればよい。害なら、そんな馬鹿な！世の中間違つとる！で、事実否認し、信念に固着すればよい。

第1次太平洋戦争・第2次太平洋戦争の経過を見ると今述べた日本人の四段論法で説明不可能な個所はない。もし、著者の説に誤りがあるとすれば、戦を遂行するに当って指導的立場にあった人達が、対戦相手に内応していた場合だけである。

断絶感の心理に生きる欧米人の戦は、対象絶滅の思想で遂行される。心的世界は、外的世界の直接の、そして、正確な反映・再構築なので、対戦相手に対する対処・処理戦略は、内界からのものと外界からのものとは一致する。従って、そこには、武士の情けや敵に塩を贈るや強いだけが武士ではないの精神は皆無である。従って、モンゴロイド代表の日本人とコーカソイド代表の米国人とでは戦さにならない。彼等の祖先はインディアンの大量殺戮の上に建国したが、第1次太平洋戦争では、原爆などによる日本人の対象殺戮によって地中海帝国ならぬ太平洋帝国を建国し、太平洋艦隊の根拠地は、真珠湾から横須賀に、占領地拡大に伴って前進した。一体感の心理に発する四段論法で戦う日本軍は、幻想の世界・狂気の世界で戦を遂行した（少くとも、欧米人はそう評価している。彼等は、戦争の進行と共にはっきりと日本人を愚者と断言するようになった。）。日本軍は、自己の幻想の世界で作戦を立案し、遂行した。これを空転・自転と云う。当然、敗北する。そして、自己消滅の道をえらぶ。これを自滅という。悲しいほどの日本的マゾヒズの作戦は、相手に何らの痛痒も与えない。甘えの心理に基づいての即自的自己愛者（つまり、ナルチスト）は、観客の拍手喝采がないとき、一転して、マゾヒストに変化する。観客への努力が、実力差の故に内向するからである。独りよがりの悲壯感・悲愴美に酔って *masturbation* を遂行する。安物のヤクザ映画そのものである。自作自演ならまだ救われるが、部下に強制して、自分は敵前逃亡して軍人恩給に与る。あるいは、代議士になる。あるいは、商事会社に入り、そこを足場に戦後の世界で大活躍（大暗躍？）する。よって、戦後の日本人は「日本的」戦争恐怖症となり、憲法改正・国軍整備へのアレルギーとなった。戦争の悲惨さを井戸端会議で毎年終戦記念日（と表現するところが日本人的である）に語り合うことが平和への道と妄想するようになった。

2002年の今日は、第3次太平洋戦争への出発点であり、今回は、「国」ではなく、「民族」消滅の結末であるが、構造改革は失敗するので、不戦消滅のはずだ。

3. 明治建国の様態

3.1 明治開国の意味：国家経営戦争の国際試合参加

① 日本国の近代国家としての明治国家の成立

幕末の倒幕運動による明治国家の成立によって、1868年（明治元年）に近代国家としての日本国が成立した（日本国の歴史は689年の「飛鳥浄御原令」によって開始された。）。以後明治135年・2002年の今日まで近代日本国の国家経営が135年にわたって遂行された。2002年の今日、日本国の現状をみると、日本国はすでに実質的には、1945年8月15日をもって崩壊したと云わざるを得ないが、形式的にはその後も存続したことになっているので、現在崩壊の危機に類していると云うべきかも。それ故、近代日本国家は、明治・大正・昭和・平成と国家経営を遂行したが、国家経営に失敗したと云える。

今回の構造改革は、近代日本国家の第3期（第2期は1945年8月16日から米財務省サマーズ長官の対日（経済戦争）勝利宣言が米「ファー・イースタン・エコノミック・レビュー」においてなされ、サマーズを今様マッカーサーになぞらえた1998年7月2日まで）の出発点であり、構造改革の行方が第3期の近代日本の行方となる。これまでの改革論議の経過の様相をみても分かるが、構造改革の失敗は必至である。とすれば、実質的には日本工業州であった第2期の日本は、第3期は「出稼ぎ国家」・「空洞国家」と称され「からゆきさん」が復活する時代となるはずだ。今から約2000年前（AD135年）に第2神殿時代の国家経営に挫折して国家所在地パレスチナから離散したユダヤ民族の現代版が展開されることになる。彼等はユダヤ教を遵守することによって今日の地球を経営する能力を身につけたが、明文化されえない日本教では、日本民族の消滅は必至である。

② 国際的生き残りゲームとしての国家経営 （国際社会の中での国家経営）

コロンブスによる1492年の西インド諸島の発見によって始まった大航海時代以後の西欧諸国の対外侵略によって全世界が彼等の植民地となった。その結果、世界の各民族・各国家は彼等の帝国主義（資本主義＋軍国主義）的政策によって構築された地球的国際社会の中に強制的に取り込まれて位置づけられた。つまり、「GLOBALIZE」されたのである。そして、彼等の構築した国際社会を生存環境とせざるを得なくなり、彼等の設定した国際ルールによってしか国家経営を遂行出来なくなったのである。

（力の原理による優勝劣敗・弱肉強食の国際競争）

その国際ルールとは、彼等の民族的精神構造である断絶感に基づいて西欧近代化時代（1550年－1700年）・近

代(1700年-1850年)の四重苦の挫折体験を通して洗練し、凝縮した力の原理による優勝劣敗・弱肉強食のルールである(勝者・強者=善人;敗者・弱者=悪人)。世界の諸国は、自国の国家経営をこのルールによる国際競争を通じての国際的生き残りゲームとして遂行せざるをえなくなった。

(明治国家の国家経営)

日本国は、黒船来航事件(1853年)を契機に開国を強制され、その結果、明治国家の建設に至り、以後前述のように、国際的生き残りゲームとして国家経営を遂行するという国際試合に参加させられた。

国家経営での国際試合遂行能力の絶対的不足は最初から分かり切ったことであり、必敗は予期された(このことが、第1次太平洋戦争(帝国主義的軍事戦争)での敗戦(1945年8月15日)と第2次太平洋戦争(資本主義的経済戦争)での敗戦(1998年7月2日)という形で現実化した)。しかし、近代国家としての日本国がこの地球の世界で存続するには、生存環境がすでに構築されてしまっている後進国日本としては、既設の競技場と既設のルールで国家経営に臨まざるをえない。そして、勝利することによってしか、独立国家として生き残る道はなかったのである。

③ 国家経営の決定因としての世界観

(国家経営の決定因としての世界観)

実力不足の後進国日本が生き残るための唯一の策は、負け戦は戦わない・勝利可能な状況でしか戦わないことである。それには、国際状況を認識する能力において、具体的に云って、米英を中心とする欧米先進諸国以上に優れていることが要件になる。

この認識能力は、ひたすら日本人が構築する世界観に依存する。つまり、世界を見る能力に依存する。自己にとっての正確な世界観、即ち、正確な世界内自己観に依拠して導出される国家経営政策が国家の存続を可能にする。しかるに、世界の諸民族の中で見る能力において最も劣っているのが我が日本民族なのである。(今日の日本国の状況はこのことの結果にすぎない。)

(世界観の欠如)

近代国としての日本国が、国家経営を2度に亘って失敗した因は、「蘆の髄から天井を見る(針の穴から天を見る)」つまり、狭い視点・視野でもって、換言すれば、無きに等しい世界観で国家経営を遂行して来たからである。貧困なる・的確さを欠く世界観に基づく策は無策に等しい(いや、まだ無策である方がましである)。また、世界観の欠如に対する無自覚さ(無自覚であるが故に世界観が欠如するのである)は、その構築を怠るので、「無為」である。無為無策では、盲人が目明きに前後見境なく対戦するようなものである。(情報が何であるか、その

本質も理解出来ずに、即ち、情報観もなしの、ハードな面での情報収集・処理体制・機構の構築など景気対策としての意味以外には全く意味がない。また、ぞろ IT 大国などを性懲りもなく目指しているようであるが、全国民がパソコンと携帯電話を所有すれば、世界的に信用ある(と思込まされている)国際的ジャーナリズムに日本全国が瞬時にして、嵌めこまれるだけのことである。米国の一石二鳥の効果を狙った作戦に乗るだけのことである。) (内閣情報室は、朝の9時から夕方5時までの営業時間だと聞く。日本時間の17:00から9:00までの間は、世界は活動を停止するとみえる。日本人の情報観とは所詮この程度である。)

(針の穴)

もし、日本国の経営にあたる当事者達が、針の穴でも所有しているとすれば(現実には、そうではないことが事実の示すところである。例証するに苦勞しない。)それは、明治135年の国際社会での国家経営での経験によって構築された視野でしかない。一方は、天とは、過去4000年間に亘って、地中海世界を越えて地球的世界の場で、ユダヤ民族を中心として西欧諸民族・西欧先諸諸国が、力の原理に依拠して展開してきた国家経営戦争の積み重ねによって構築されてきた世界のことである。

天は天のスケールで観察・認識せねば、その実態は明らかにならない。まして、その天を駆動するメカニズムの理解などは論外である。留学しても、そのような国家の最高機密に属するような極秘情報など教授するはずがない。

歴史など年号を覚えるだけの科目である・経営(感覚)などは、自然に身に付くものである、わざわざ学ぶ必要はないなどの認識の教師の存在は何ら驚くに当らない。(しかし、そのような勇ましい(?)セリフを聞くと帝国陸海軍の参謀(無謀・横謀・乱謀の三謀の説あり)の姿と二重写しになる。)勿論、その程度の認識での世界観による経営行動も可能である。ただ、挫折することである。そのことが、現在我々の眼前に露呈されているのである。

3.2 明治政権の成立の様態としての明治維新

① 明治維新という言葉

倒幕によって新政権が成立したのであるが、その成立過程、もしくは、メカニズムを同定することが既成の概念でもって是不可能なのである。維新という言葉は単に現象面を指す言葉であり、新政権成立のメカニズムはそこには何等表現されていない。

そのメカニズムは、決して革命と呼べるものではない(仏革命・ロシア革命)。クーデターでもない。政権奪取のプロセスを見ると乗っ取りに一番似ているが、正確に

はこの言葉にも値しない。非常に粗雑な言葉ではあるが(事実そのものが、見苦しくお粗末であるから仕方がない)寝取りという表現が行為のレベルに妥当する。

② 政権獲得の実態

要するに、実態は、権力志向欲が旺盛な一部の人間(岩倉具視・木戸孝允・西郷隆盛・伊藤博文・大久保利通など)が、個人的動機で(と云わざるを得ない)、徒党を組んで権謀術策を弄して(例えば、反対派の公郷の会議出席を御所の門で阻止して妨害するなど)、幼少の明治天皇(親幕派の孝明天皇の原因不明の急死)を籠絡して(幼少の明治天皇に天下国家の政治的判断など不可能)、徳川家から政権を奪取して、自分達の私的な集団(の在立基盤の不透明性)で私物化し(権力配分の恣意性)、それを明治国家の国政権・経営権としたとしか云いようがないからである。

③ 大義名文の欠如

何故ならば、事実として、政権奪取に先立って天下に公表された明文化された大義名文がなかったからである。それ故、政権奪取のプロセスにおける現像面にしか着目できない。その結果、私的集団の私的動機による云々となる。とにかく、現像をみると、社会の様態が変化したことはまぎれもない客観的事実であるから、明治維新としただけのことである。言語不要の日本民族であるだけに、彼の用いる言葉には全く意味がないのである。

④ 行為に先立つ言葉の必要性

改革や変革にはその必要性和推進者の正当性を主張する理論を必要としたというのが欧米社会での歴史的事実である(宗教改革・清教徒革命・米建国・仏革命・ロシア革命など)。理論欠如の行為においては、行為は意識によってではなく、つまり、理性・知性・思考においてではなく、専ら要求・欲求という情欲・感情的次元においてしか評価出来ない。断絶感の心理を抱く住人の世界では、先ず言葉が必要である(自由・平等・博愛など)。それも、日本人のように何処で聞きかじって体質に合わないで消化不良を起こしているにもかかわらず、受け売りする言葉ではなく、民族の歴史と共に数千年の思索を経た自家製の言葉が必要なのである。

⑤ 改革の手順

組織改革の前提は、当然のこととして既存の組織が遂行するその時点の経営政策が、組織の依拠する生存環境に対して不適合であり、より適合的な経営政策(例えば、民主主義・社会主義に基づく国家経営政策など)が要求される時である。既存の組織の経営権力を掌握している政権・権力者が、新しい経営政策の採用を拒否したとき、行動が発起される。即ち、新経営政策の提唱者及び彼の支持者の集団による既存の政権を何等かの手段で打倒する行動が発生する。打倒に成功したとき、新政策を

遂行しうる組織と政権が樹立される。

⑥ 経営政策による経営行動

著者は、前途のようなやり方が正道であると主張するつもりはない。しかし、この手順は、当事者達に新経営政策をいやが上にも明確に意識化させ、言語化させ、成文化させる。それ故、現実の経営行動を遂行するに際して、採るべき行動が明確になる。よって、政策の効果が挙がるというメリットを持たらす。

⑦ 日本人の無為無策

一体感の心理を抱く住人の世界では、言葉は不要である。以心伝心が可能だからである。一体感の心には対峙的世界が不在である。世界不在の心に世界観などない。世界観なきところ策など生じない。常に無為無策である。事前管理など言葉の遊びである。現実には、事後対策・対応であり、先行きは常に不透明である。世界情勢は、戦前も戦後も相変わらず、複雑怪奇なのである。

意見・思想・哲学・世界観・言葉・論・観などがなくとも欲求は存在する。従って、言葉は、パトスがロゴスの衣を着けたものだと言うが、事に臨んでも日本人には衣がない。これ故、客観的事実として観察されるのは、欲求に基づく要求充足行動だけである。これでは、国際会議では常に資金援助の役割だけが強要されるだけである。

4. 政治不在の意味

4.1 政治不在

一体感の心理は、論理的帰結として、日本人の社会を政治不在の構造にする。2002年の現在の日本社会の政治的状況は、正にこのことを露呈している。構造改革など絶対に不可能である。構造改悪に陥ること必至である。

政治不在の構造とは、国家経営政策に関して

1. 政策決定に参加する成員個人に政策が存在しないこと
2. 成員に政策が存在したとしても、それらの政策の中から最良(でなくとも良い)政策を決定・導出することが不可能であること。
3. 政策が決定されたとしても、政策を実施・遂行するに際してのリーダーの権限・権力が制約されること

という3つの条件が存在する構造である。

4.2 政策不在について

条件1の政策不在については、すでに述べてきた。

4.3 衆愚政治としての民主主義

① 衆愚政治としての民主主義

民主々義とは、多数決原理によって衆議を決する方法で組織を経営・運営する、即ち、政治を遂行する方法のことである。真理は少数の側にあるという言葉もあるが、少なくとも多数意見によって決定される政策が最良策（あるいは、良策）であるという保証はどこにもない。事実、民主々義の本場の欧米社会でも、民衆主義に基づく政治のことを衆愚政治と称している。だから、民主々義に関して先達である欧米諸国では社会の実際の支配者は、善悪は別にして、自己の欲する政策が多数決原理のフィルターを通して入手出来るような措置を講じている。日本人はそこを見落としているだけのことである。

② 日本の民主々義

元来、意見を持たない日本人に多数決原理を適用すれば、目も当てられない愚案が決定される結果となる（選業で政治家を選出すれば、とんでもない愚者が選出されることになる。）。(従って、民主化とは、はっきりと云って、後進国にとっては亡国への道である。だから、どこかの国は、他国へ熱心に民主化を強要するのだ。)

さらに悪いことには、日本には日本的民主々義が存在する。日本的民主々義とは、多数決原理の絶対視のことである。多数決原理の絶対視とは、多数意見は常に正しいという信念のことである。この心理は、一体感の心理から由来する。一体感の心理からすれば、「人間皆同じ心だから、同じ意見に到達し、多数派となる。少数派に属する人間の心は単に異常なだけである。」となる。

従って、万機を公論に委ねるならば、欧米社会の場合に比べてレベルが二段階下の愚案・愚見・愚策（つまり、意見とは云えない意見が、最良の意見であるとの絶対的的信念を持って決議された愚案・愚見・愚策）が、集団の決議として採択されることになる。(我々は日常的にそのような意見(?)を新聞の投書欄でお目にかかる。)

だから、日本の社会で部下に意見を求めることに熱心なリーダーは、人気を気にする人か、あるいは、自己の創出能力に自信のない人か、あるいは、責任を回避したがる人かのいずれかである。現実には3つの人格が同一人物の中に混在している。

4.4 リーダーの権限・権力に対する制約

中根⁷⁾によれば、日本人の「タテ社会」は、構造的にリーダーの権限・権力、即ち、リーダーの下す指示・命令の執行力・強制力を制約するとのことである(このことに対する彼女の説明そのものには納得しがたいが、彼女の理論の中でこのことを論理的に説明出来る。)

著者は一体感の心理に基づいて説明する。一体感の心理は、差別アレルギーを生み、それは、能力平等感につながり、自己の愚案・愚見・愚策に自信を持つ。事に臨んで、人間皆同じの妄想にかられて、臆面もなく自己の

ものでリーダーの下す指示・命令を相殺する。

5. 政治不在への措置としての立憲君主国家・天皇国家における現人神の創設

5.1 国策・政策の遂行の条件

以上のことから国家経営において最良の国策・政策を効果的に実施・遂行する為の条件は、以下の3つの条件である。

1. 衆愚の愚案・愚見・愚策を抑圧すること
2. 国策・政策立案に関しては、最高の能力を持つ人間(明治国家においては元老)の創出した策を国策・政策とし、それをリーダー(明治の天皇制国家においては、天皇)の指示・命令として
3. 国民に甘受させること

この3つの条件を現実的諸々の制約条件下で具現化したのが、明治国家における現人神の天皇による親政という政治機構・体制・権力の下での元老政治であった。一体感の心理の住人の国での最高の政治様式であった。このことは、日本人の民族的精神構造としての一体感の心理が益々顕著となった2002年の現在、一層妥当することである。何処を向いているのか不明の方向感覚なき(本当はあるのだが、日本人の方を向いての方向感覚かは定かではない)総理大臣の下では結果は見るまでもない。

5.2 明治国家における国家経営の政治機構

近代国家としての明治国家は、国家経営において最良の国策・政策を効果的に実施・遂行するために、前述のような条件を勘案して、現人神の天皇による親政の下での元老政治という国家経営の政治権力の機構を創出したのである。この措置は、日本人の一体感の心理から由来する政治不在を止揚する措置として、当時の日本国の置かれた状況を考えれば誠に妥当な措置であったと云える。いや、論理的には、日本人の心理が存続する限り永遠に妥当な措置である。従って、第1次太平洋戦争の敗戦後においても、第2次太平洋戦争の敗戦後2002年の現実的においても他のことを考えなければ、同じ事が云える(だからこそ、マッカーサーは、天皇を象徴的存在に格下げしたのである。)[平然と車内で化粧する脳]という現象に象徴されえいるように、歴史的に見て一体感の心理が最高度に発露されている今日こそ(日本人社会においてこれまでの生活環境が永続するならば、時代の進行と共に一体感の心理の発現は上限なく増大することは確実である)天皇制が緊急に必要とされるのである。

5.3 現人神の創設

天皇の原型は、邪馬台国の女王卑弥呼にある(和歌森²⁾)。卑弥呼は巫女であったという。巫女とは、神と

人民との間に介存し、神意・神託を人民に伝え、民意を神に祈念する存在である。いわば、神主のような存在である。神の近くに位置する存在は神性（カリスマ性）を帯びる。日本人の甘えは、人民の神への甘えとして巫女によって仲介され、神によって受容されることによって、神の権威が発生する。次いで、神の権威が巫女にも分与される。これが、天皇の神主的性格・神性・権威の由来である。

「日本的マゾヒズムの原理」(小此木⁸⁾)によれば、人民は神性、即ち、権威を受容する。何故ならば、権威の受容は、甘えの発動を可能にするからである。

日本人の甘えの心理は、受容の原理を偏好する。反面力の原理を拒否する(西欧人の断絶感の心理は、力の原理を生成する。)。甘えの心理は、権力者の権力(力の原理)に基づく彼ら意思・指示・命令に対して拒絶感・拒否感を生ぜしめる。権力者(征夷大将軍)の意思は神性(天皇)による権威に裏付けられることによって受容されやすくなる。ここに日本の歴史における歴代の権力者が尊皇の姿勢によって天皇から征夷大将軍に任命され、天皇の神性による権威によって彼の国家経営権・政権の正当性を取り付けるという伝統が発生したのである。

明治国家において国家経営の政策の実施・遂行に際して、為政者の意思・指示・命令が国民によってより効果的に受容されることが、明治国家の国際的環境からみて、必要であった。

このことを達成する手段が、

第1に、天皇を「現人神」に格上げすることであった。このことによって天皇の神性・権威は、一段と増大した

のであった。このことは、為政者の意志・指示・命令の国民による受容を一層促進させたのであった。和歌森²⁾は、天皇制の歴史において、明治維新から1945年8月15日までの期間は天皇の権力(正確には権威)が最も大であった特異な時期であったと述べている。

第2に、天皇親政、即ち、国民との間に征夷大将軍を介在させず、天皇が国民に直接するという政治機構にした。このことによって、下された意思・指示・命令の純粹性とそれの持つ権威性とを強化したのであった。このことは、命令の受容度を増大させたのであった。

かくて、ここに「現人神」による「神性」が創出された。

文 献

- 1) 塹江清志ら：「[天皇]の「社会心理的基盤」, 名古屋工業大学紀要, pp.207-215, Vol.53, (2001)
- 2) 和歌森太郎：「天皇性と日本人の性格」(現代心理学シリーズ第2巻「日本人の性格」第2章), 朝倉書店, (1970)
- 3) 塹江清志ら：「[一体感]と「断絶感」, 名古屋工業大学紀要, pp.185-190, Vol.50, (1998)
- 4) 澤口ら：「平然と車内で化粧する脳」, 扶桑社, (2002)
- 5) 土居健郎：「甘えの構造」, 弘文堂, (1971)
- 6) 塹江清志編著：「労務管理」(生産管理 理論と実践 6), 日刊工業新聞社, (1994)
- 7) 中根千枝：「タテ社会の人間関係」, 講談社, (1967)
- 8) 小比木啓吾：「日本人の阿闍世コンプレックス」, 中央公論, (1982)